

はしがき

山本一巳

娯楽は、衣・食・住に次いで生活に欠かせないものである。かつては労働の対概念として捉えられていたが、現在では、その意味するところはかなり広範である。娯楽に相当する他の言葉としては、遊び、レジャー、レクリエーション、余暇、などがある。また、その中身でみると、文化・芸術、スポーツなどの他ジャンルとの区分けが難しい。娯楽の種類も余暇を楽しむということで、時代により地域によりその様相を異にしている。第三世界の場合もその例外ではない。

第三世界での娯楽を考える場合、次の四つの視点が挙げられると思われる。

第一に、その国、風土に開化し、独自に特徴的にみられるものである。これはわれわれが享受しているような娯楽が、途上国の場合はともすれば上流、中産階級以上の人に限られているのに対し、庶民レベルで広く親しまれているものである。例えば、

タイにおけるボクシング、フィリピンにおける闘鶏、インドネシアの影絵、中部アフリカにおけるザイル音楽、ラテンアメリカにおけるタンゴ、などである。

第二に、途上国においても急速な近代化、都市化、マス・メディアの発達、生活水準の向上により、娯楽も大きな変容期にさしかかっていることである。農村では依然として村落共同体で皆が享受する祭、野外映画、田舎芝居、踊りなどが娯楽の主流を占めている一方で、都市では近代文明の恩恵を受け、かつての主要な娯楽であった映画からテレビ、カラオケ、ディスコ、行楽、観光などの新しい娯楽が一般的になりつつある。

第三に、娯楽が産業としてどの程度なりたっているか、今後どのような発展をたどろうとしているかである。娯楽産業の最たるものは映画産業であろう。国によっては賭事も盛んで、競馬は多くの国でみられるし、ウルグアイやマレーシアのゲンティン・ハイランドのようにカジノを公認している国もある。行楽・旅行などは、もともと外国人観光客誘致のためのものが主たるものであったが、近年では居住している人たちも利用し、レジャー産業が盛んになりつつある。さらに都市における近年のディスコ、カラオケなども飲食業と相まって中産階級の間には広がりを見せ、産業としても大きく成長しようとしている。

第四に、宗教のもつ意味が大きいことである。仏教圏、イスラム圏、カソリック圏などではその宗教によって娯楽が大きく規制を受けるとともに、宗教にまつわる娯楽も多い。すなわち、イスラム原理主義が強いところでは、酒、煙草、賭事などの世俗の娯楽に結びついた娯楽は敬遠されることになる。イスラエルにおける安息日も娯楽を大きく制約している。逆に、寺院めぐりなどが庶民の憩いになっている場合もある。このような視点を提示して各執筆者に呼びかけた結果、本書で取り上げることができた共通する娯楽としては、次のものがある。

まず、最も手軽な庶民の憂さばらしと娯楽はおしゃべりである。女性の場合は三々五々集まり、井戸端会議に花を咲かし、男性は地酒でも飲みながら憂さをはらすことになる。ベトナム、パキスタン、バングラデシュ、スリランカ、エジプト、ケニアなどの所論でその一端が紹介されている。

第二に、映画が多く、国で依然として娯楽の王者として大きな地位を占めているが、国によっては先進国同様斜陽化してきている。娯楽産業としてなお隆盛を誇っているのは、中国、香港、フィリピン、インドネシア、シンガポール、ミャンマー、スリランカ、エジプト、イラン、メキシコである。映画産業が斜陽化しつつある国としては、インド、パキスタン、バングラデシュ、ブラジル、アルゼンチンなどがある。映画の

斜陽化はテレビ、ビデオの浸透と表裏をなしている。

第三に、音楽・踊りに関わる娯楽も伝統的なものから新しいものとバラエティに富んでいる。伝統的なものを紹介したものとしては、インドネシア、モロッコ、コートジボワール、コンゴ、タンザニア、ブラジル、アルゼンチンがある。新しいものとしては、韓国、台湾、マレーシア、ベトナムでのカラオケの流行が紹介されている。

第四に、手軽に金がかからずにできるスポーツとしてサッカーが途上国のどこにおいても若者の間で非常な人気を博していることである。さらに大人の間でも観戦スポーツとしてサッカー人口は増大している。本書でもサッカーを取り上げている国は多い。バングラデシュ、エジプト、イラン、イラク、コートジボワール、アルゼンチン、コロンビアなど。国によってはサッカー以外のスポーツが盛んなところもある。フィリピンのバスケットボール、ジンバブエのラグビーなどである。

本書には、第三世界の三一カ国・地域に関する三三の所論と日本に関する補論とを掲載している。本書から娯楽が各国で庶民の生活の中に深く根付いていること、また多様性に富んでいることを汲み取っていただき、第三世界の理解の一助にしたいだければ幸いである。